



のっぽの手

〒960-8034 福島市置賜町1-29 佐平ビル
 TEL 024(528)1211 FAX 024(528)1218
 E-mail center@f-npo.jp
 URL <http://www.f-npo.jp/>

鳩山政権とNPO

理事 北村 寧

鳩山・民主党政権がNPOを重視していることはよく知られています。このことは大いに評価されるべきことですが、その実際の中身はどのようなのでしょうか。

まず、昨年7月発表の「マニフェスト」です。各論の34で、「政策目的」として「市民が公益を担う社会を実現する」と「特定非営利活動法人をはじめとする非営利セクター（NPOセクター）の活動を支援する」の2点を掲げ、「具体策」として「認定NPO法人制度を見直し、寄付税制を拡充するとともに、認定手続きの簡素化・審査期間の短縮などを行う」と「国際協力においてNGOの果たす積極的な役割を評価し、連携を強化する」の2点を指摘し、「所要額」を「100億円程度」と明記しています。

昨年9月の政権成立後、10月26日に行われた鳩山首相の「所信表明演説」は、「マニフェスト」から一歩進んで、「新しい公共」という考え方を提起し、市民やNPOの活動の支援を「21世紀の政治の役割」と述べました。

「『新しい公共』とは、人を支えるという役割を『官』と言われる人たちだけが担うのではなく、教育や子育て、街づくり、防犯や防災、医療や福祉などに地域でかかわっておられる方々一人ひとりにも参加していただき、それを社会全体として応援しようという新しい価値観です」。「政治ができることは、市民の皆さんやNPOが活発な活動を始めたときに、それを邪魔するような余分な規制、役所の仕事と予算を増やすためだけの規制を取り払うことだけかもしれません。しかし、そうやって市民やNPOの活動を側面から支援していくことこそが、21世紀の政治の役割だと私は考えています」（以上、10月27日付朝日新聞）。

この「所信表明演説」から3か月後、本年1月29日に首相就任後初の「施政方針演説」が行われました。残念なことに、この演説では、上記「21世紀の政治の役割」について、ほとんど新しい提起がなく、首相は「新しい公共」円卓会議が初会合を開いたことに触れ、「『新しい公共』の担い手を拡大する社会制度のあり方について、5月を目途に具体的提案をまとめてまいります」（1月30日付朝日新聞）と述べたのです。鳩山政権

には問題を先送りすることなく、しっかりとした「政策力量」（政策を提起し、実行する力）を期待したいと思います。



『ふくしま市民活動フェスティバル2009を終えて』

常務理事 齋藤 健

昨年度に続き、2009年度も市民活動フェスティバルを行うことがネットワークセンターの理事会で話題に上ったのは昨年5月頃のことでした。

H19年度は場所をスカイパークとこむこむの2ヶ所で延べ3日間にわたり、県北NPOネットを主催者団体にして行われ、H20年度は場所をこむこむにしてH21・2月にフェスティバル実行委員会を主催者団体にして行われました。（H19年度以前は県北NPOネットを主体にして数年に亘って、街なか広場等で開催されています。）

こむこむでは物販が出来ませんでしたので、今回は物販が出来る場所ということで、コラッセを選び、早速、予約を入れて場所を確保しましたが、希望の日にちは取れなくて、少し遅い12月13日となりました。（フロアは1Fアトリウム、3F小会議室、3F企画展示室、4F多目的ホールを予約。）

準備委員会、そして、実行委員会を立ち上げ、事務局を福島市市民活動サポートセンターに置き、企画、広報、各フロアの責任者を決め、諸作業を分担して行う体制となりました。

当初は参加団体の申し込みも少なく、広告の申し込みも芳しくなかったのですが、後半に入ってから実行委員の方々の大奮闘によりまして、最終的には参加32団体、広告協賛団体も目標に達しまして何とか格好がついたような次第です。

資金的には福島市から50%の補助が期待できますが、全体の費用を昨年度より少なく設定し総額を40万円に引き下げたことは画期的なことであったと思います。（H20年度は約60万円の実績）経費を節約するためにいろんなところで工夫がありましたし、各参加団体の協力もありまして、収支はまあ何とかの範囲には収めることが出来ました。

また、各フロアの内容は物販、パネル展示、パフォーマンス、イベント、映画、意見交換会等々と多彩であり、責任者の方の調整と準備も大変であったことと思います。

来場者は延べ1,000人を越える市民の方々に来て頂きまして、なかなかの盛況でした。

その中で思いましたことは市民活動フェスティバルのようなイベントを県北地域の市民活動団体が一緒になり行うことに大いに意義があると感じました。

実行委員会に参加された各団体の協力と知恵を上手く噛み合わせることで、1+1=2以上の効果を引き出すことが可能です。

一般市民の人たちに市民活動の内容を知ってもらうことが一番の目的ですが、他の団体の人たちとの交流も出てきますし、共通の催しを行うことでお互いの団体の持つ特長、地力等も見えてくるものがあります。

反省点としては展示等にはもう少し美的感覚（センス）の工夫の余地があると感じました。

宣伝、広報、資金対策にもさらに知恵と工夫次第ではもっと盛り上がり期待できます。

今後は継続して、少しずつ進歩（進化？）して行って欲しいと願っています。

最後に事務局を担当しましたが、非力なために、かなりの部分で関係者の皆様にご迷惑を掛けましたこととお許し願いたいと思います。



「ルイズさん」との出会い

NPO法人 ルワンダの教育を考える会 佐藤俊子

アフリカを意識することは、日常生活ではほとんどありません。その中で私が小学生の時にJRC活動の中でアフリカの国々の名前の各班で活動したことが思い出されます。

1999年わが子の中学校のPTA役員で講演会の企画をすることになり、知人の紹介で初めてアフリカのルワンダという国からやってきたルイズさん一家におじゃましました。日本語の上手な母・シャイな父と元気な4人の子ども達に会い、どこにでもいる「おかあちゃん」でした。講演会も全校生徒と親子で今を大事に生きることを学びました。その後、うつくしま未来博・地球市民フェスティバルなど小学生の娘とブースを手伝いながらさまざまな出会いを楽しむことができました。



その間2001年にルワンダの教育を考える会がNPO法人に認定されたり、ルワンダに軽トラックを送ったり、現地では2教室で学校が開校したりと活発に動き始めていたようです。その後正会員から理事へ、私の出来る範囲で私の得意とすることでお手伝いできればと思い、今に至っています。

ルイズさんは福島県の研修生として10ヶ月間洋裁の勉強後、1994年帰国後すぐ内戦が始まり、難民キャンプで福島の友人に向けた太陽光発電のFAXに日本語で「生きています」と書いたことがきっかけで、日本人医師の通訳となり子ども達の赤痢も治り、縁あって日本で暮らすことになったことを知りました。同じ年頃の子どもの子育てをしているもの同士、「かけがえない命」ルワンダの子ども達もわが子達のように、教育を受けることによって共に生きていくことの大切さを学び平和な未来を作っていけるように末永く見守っていきたいと思っています。



17文字の風景

ふくしま情報ステーション所長 齋藤 美佐

「親父から 受け継ぐ薄毛と ビートルズ」これは、タワーレコード主催のビートル川柳の最優秀作品です。ウマイですね。しかし、川柳の歴史を紐解くと、現在の川柳はブラックユーモアが過ぎて、本来の川柳のイメージを大きく歪めているようです。

川柳は「うがち」「おかしみ」「かるみ」という三要素を特徴として人情の機敏や心の動きを書いた五七五の音を持つ詩をいいます。(Wikipedia参照)「うがち」は表に現れない事実や世態、人情などのこと、「おかしみ」は思わず笑ってしまうユーモア、「かるみ」は芭蕉が晩年に到達した俳諧の理念であり、日常の中の美しさを詠うことです。

そんな川柳の原点があるなかで、自由におもしろおかしく詠われるようになったきっかけは「サラリーマン川柳」(1987年～第一生命企画コンクール開催)でした。サラリーマンをユーモラスに詠った川柳は、世相の反映としてマスコミに取り上げられていく一方で、最近ではブラックユーモアが過ぎて、格差社会の拡大や熟年離婚の推進になるとの声があり、危惧されています。

川柳の原点を歪めるほどに経済の不況や政治的不安定も相俟って、大衆の共感を獲得した「語呂合わせ川柳」は、いまやTV番組に編成され高視聴率獲得に一役買っています。

たった17文字に描かれている可笑しさや悲哀、情の深さにホンネを読み、「んだ、んだ、みーんなおんなじだ」と孤立感から開放されるのです。この共感こそが、いまの日本にいちばん必要とされているのかも知れません。

今年はネットワークセンターでも、NPO川柳を募集してみましようか。NPOh! ah-NPOh! NPOh! 苦くも楽しい五七五が集まり、面白いことになりそうですね。

2010年初春、皆さんに次の川柳をお届けして、新年のごあいさつといたします。

あきらめの 「あ」の字を捨てて きらめいて (ユースキン格言募集・優秀賞作品)

第56回NPO研究会の報告

副理事長 星野 珙二

日時：2009年12月17日（木）午後6時30分～8時30分

場所：ウィズもとまち会議室（4F会議室）

テーマ：岩手・盛岡の市民活動と「いわてNPOセンター」の役割

話題提供：高井昭平（いわてNPOセンター理事長）

盛岡市で活発に事業を展開している中間支援組織「いわてNPOセンター」の理事長、高井昭平氏を招いて、岩手県内や盛岡市のNPO活動の状況や「いわてNPOセンター」の事業展開、その課題等について本音で話していただいた。「いわてNPOセンター」では、直前に旅行業者代理業の新規登録申請書に関わって担当職員が申請書の偽造という不祥事を引き起こしており、新聞報道にもなったことから、理事長の来福についていささか不安があったものの、再発防止のコンプライアンス・マニュアルを抱えて颯爽と研究会に駆けつけていただいた。今回の不祥事の要因について尋ねたところ、組織の膨張の中でリスク管理の必要性を認識しつつも管理体制作りが追いつかなかったという説明が返ってきた。私たちにも思い当たる要因である。

さて、「いわてNPOセンター」は、有給スタッフ68名を抱えた大きな組織であり、8つの事業部門を編成し、平成21年度決算においては事業規模3億円に迫る活動を展開している。組織図によると、8つの事業部門は、①事業開発、②市民活動支援、③地域振興、④就業支援、⑤産業支援、⑥ICT、⑦岩手県民の森、⑧岩手県公会堂となっている。①は営業的な取り組みを含めて積極的に新しい事業の展開に取り組む部門で、説明を聞いて急成長の牽引役を担ってきたところと推察した。②は私たちふくしまNPOネットワークセンターが取り組んでいる事業、③は交流人口の増大も目指す事業、④はニート・中後年者の就業支援の事業、⑤は貸し工場の斡旋や産学連携のネットワークづくり事業、⑥は情報システムの研修・相談・開発に関わる事業、⑦、⑧は県からの指定管理者事業である。

話を伺って、「いわてNPOセンター」の活動は事業型NPOの一典型のように思われた。そして、それは理事長の経歴、損害保険会社に勤務の後経営コンサルタントに従事した経歴に深く関わりがあることを確認した。

ふくしまNPOネットワークセンター事務局 <http://www.f-npo.jp/>

〒960-8034 福島市置賜町1-29 佐平ビルB1

TEL 024-528-1211 FAX 024-528-1218

E-mail : center@f-npo.jp

福島市市民活動サポートセンター

<http://www.f-ssc.jp>

ふくしま情報ステーション

<http://www.machi-fukushima.jp/>

